

国境を越える Girlhood ——*Girl's Own Paper* の場合

牟田 有紀子

1. はじめに

印刷、交通、運搬のネットワークが急速に拡大した 19 世紀末、イギリスで 10 代から 20 代の未婚女性を中心に大流行した少女雑誌『ガールズ・オウン・ペーパー』（*Girl's Own Paper*, 1880-1956）は、海外に輸出され、世界の読者がイギリス人少女としてのアイデンティティやイデオロギーを共有した。『ガールズ・オウン・ペーパー』は海外からの注文が可能だったため、輸出先は帝国内に留まらず、英語圏の少女が住む国にはどこにでも発送されていたと考えられる。イギリスと世界を繋ぐ媒介になった『ガールズ・オウン・ペーパー』は、世界の少女がどのような生活を送っているのかという知識、およびイギリス人少女という視点から見たときに、世界をどう解釈すべきなのか、という立ち位置を読者に提示した。

『ガールズ・オウン・ペーパー』というタイトルからわかるように、この雑誌は「少女」を読者としている。ただ少女といっても、この時代の少女は、Sally Mitchell が “The new girl—no longer a child, not yet a (sexual) adult—occupied a provisional free space. Girls’ culture suggested new ways of being, new modes of behavior, and new attitudes that were not yet acceptable for adult women (except in the case of the advanced few)” (3) と言うように、初等教育を終えていて最早 “child” ではないものの、まだ結婚して “adult” になりきっていない宙吊りの期間の女性を指しており、また母親世代にはなかった新しい文化形態を持つ存在でもある。同時代のどの少女雑誌も、子どもでも大人でもない少女とは何なのか、少女とはどうあるべきかというテーマを頻繁に取り上げ、それぞれの雑誌が理想とする少女時代の過ごし方、つまり girlhood を構築し、読者に拡散した。ここでは、単純に少女でいられる時期という意味だけではなく、理想の少女像、少女としてのアイデンティティ、イデオロギーを含むより包括的な概念を持つ語として girlhood という言葉を使っている。

本稿では、『ガールズ・オウン・ペーパー』がどのようにして世界を描き、またイギリス人少女もしくはイギリスの「外」の少女の girlhood の構築と拡散を試みていたのかを考察する。なお今回は『ガールズ・オウン・ペーパー』が特に海外に関する記事を集中して掲載していた 1880 年代の記事に焦点を当てる。引用箇所はすべて年版からのものである。

2. 『ガールズ・オウン・ペーパー』と girlhood をめぐる背景

まず『ガールズ・オウン・ペーパー』という雑誌と、19 世紀末イギリスにおける girlhood を巡る背景を確認しよう。この時代のイギリスでは、「子ども」を対象にしたモノの商業的価値が

上昇し、安価な子ども向けの読み物が大量に生産された。1ペニーや半ペニーの子ども向け雑誌が大量に出版された結果、「ペニードレッドフル」と呼ばれる、暴力的で扇情的な雑誌が人気を博した。そこで、このことを問題視した福音主義系宗教団体の宗教叢書協会 (Religious Tract Society) は、1879年に少年向け雑誌『ボーイズ・OWN・ペーパー』(Boy's Own Paper, 1879-1967)を創刊したのである。『ボーイズ・OWN・ペーパー』は「おもしろくてためになる」質の良い雑誌として大成功を収めた。『ボーイズ・OWN・ペーパー』には女子読者も多かったため、宗教叢書協会は少女向け雑誌への需要があることを確信して、翌年1880年に『ガールズ・OWN・ペーパー』の出版に踏み切った。この両誌の登場以降、イギリスでは「子ども向け」だった雑誌のジェンダー化が進み、雑誌による「少女」の言説の構築が加速したと考えられている。

『ガールズ・OWN・ペーパー』は、19世紀末のイギリスで最も売れていた少女雑誌で、最高で週に25万部を売り上げた。掲載されている記事の内容から、ターゲット層は低層中産階級から中産階級の少女だったと思われる。1部1ペニーの週刊誌で、中産階級の子供であれば、お小遣いで十分購入できる額だったと考えられる。掲載内容は小説、詩、楽譜、絵、歴史、家政など多岐に渡り、幅広い階級と年齢層の読者を惹きつけた。クリスマス商戦や海外への輸出のために、1年分をまとめた年版も発売された。年版はプレゼントにふさわしく、金文字や布で豪華に装飾してあった。

『ガールズ・OWN・ペーパー』の特徴として、作文や手芸の出来を競う賞金つきコンペティションが開催されたということが挙げられる。つまり、少女が競争しお金を勝ち取るという、一世代前だったらタブー視されていたようなことがエンターテインメントになったということである。また、大人の女性が読む雑誌と同様に、編集者が読者の質問や相談に答える読者投稿欄も設置された。この投稿欄こそが読者の生きた声を聴くことができる場所で、当時の少女が実際にどのような事象に興味をもっていたのかを垣間見ることができる。もちろん、この投稿欄に掲載されている意見は編集者によって選抜されているわけだが、この時代の少女が単なる情報の受け手ではなく、発信者になることも可能だったということは重要だろう。ここには Henry Jenkins が “. . . fans . . . not simply as consumers of mass-produced content but also as a creative community that took its raw materials from commercial entertainment texts and appropriated and remixed them as the basis for their own creative culture” (1) と定義する “Participatory Culture” の初期形態を見出すことが可能である。『ガールズ・OWN・ペーパー』は、読者を教化対象であると同時に、雑誌の作り手と見なしていたと言える。編集者と読者の双方向的な交流により、『ガールズ・OWN・ペーパー』は情報を動かす「メディア」として十分に機能したのである。

では、『ガールズ・OWN・ペーパー』が提示する girlhood とは、どのようなものだったのだろうか。それは Kristine Moruzi が指摘するように、「心身ともに健康な」少女時代であり、それが理想とされる少女観であると言える。『ガールズ・OWN・ペーパー』は、特に健康増進に力を入れていた雑誌であった。美容や健康に関する記事や読者の質問や相談への回答を担当する専門の医師 Medicus (Gordon Stable) を雇い、一貫した身体教育を提供していたことは興味深い。Medicus は、萎黄病のような若い女性特有とされてきた病気や、「細く、青白く、すぐに気を失ってしまうはかなげな女性」を過度にロマンティサイズするインヴァリディズムを全面的に否定した。その代わりに大抵の心身の不良は消化不良が原因であるためコルセットをやめ、消化によいものを食べ、よく寝たら治ると繰り返し主張したのである。また女性にもできる運動を多く紹介しており、学校教育にも体育が導入されたという記事もある。この雑誌において、心身の弱さが

過度に美化されることはなく、健康な身体には健康な精神が、そして健康な精神には健康な身体が宿るという身体観が提示されている。

もう一つ母親世代の *girlhood* にはなかった要素として、女子教育の導入が挙げられる。『ガールズ・オウン・ペーパー』は、教育についても積極的に議論しており、家庭教育、学校教育、大学教育について、多角的な意見を掲載している。例えば、1881 年掲載の “How to Improve One's Education” という記事は、初等教育を終えた後も勉強を続ける意義を説いており、教育の主たる目的は “increasing her own usefulness” (637) だと説いている。この記事では、少女は将来健全な家庭を作り、知性の面からも夫と子どもを支えなければならないという理由から、女子教育が肯定的に受け止められているのだ。宗教団体が出版している『ガールズ・オウン・ペーパー』が、女性の目指すべきゴールを良妻賢母に設定しているというのは当然のことである。しかし、身体と知性を鍛えることによって、女性としての役割を全うし得ると主張していることから、この雑誌が「心身ともに健康な」*girlhood* を構築しようとしていたことがわかるだろう。

3. 『ガールズ・オウン・ペーパー』と世界

このように、読者の存在を強く意識し、「心身ともに健康な」少女を育成することを目標としていた『ガールズ・オウン・ペーパー』だが、Moruzi と Michelle J. Smith が指摘するように、ここにはソーシャルダーウィニズム的思想が色濃く表れている (Moruzi 83; Smith 43-4)。つまり、強い身体を持つのは、少女自身のためのみならず、強い子どもを産み育てるためであり、ひいては強い帝国を築き、守るために推奨されている、ということの意味している。少女が健康になり、因習的女性像から解放される進歩の裏には、帝国の言説が存在するということは否めない。しかしながら、『ガールズ・オウン・ペーパー』では、帝国という枠組みがあるからこそ、『ガールズ・オウン・ペーパー』の *girlhood* がいかに国境を越えて世界中の少女に拡散され、共有されたのかを、検証することが可能になる。

越境の表象を考察するにあたり、まず『ガールズ・オウン・ペーパー』の「外国」への基本的な態度を確認したい。前述のように、帝国のために健康な少女を育成しようとする『ガールズ・オウン・ペーパー』と帝国の進退は切っても切れない関係にあるが、『ガールズ・オウン・ペーパー』は帝国の中だけではなく、世界中の国々に大変興味を持っていた。例えば、編集者が “our girls” と読者に呼び掛けるとき、その対象は “British or foreign, old or young, correspondents or only readers” (“Answers to Correspondents,” vol. 5 383) とあるように、国籍も年齢も雑誌への貢献度も関係ない、すべての読者である。これは『ガールズ・オウン・ペーパー』の一貫した態度で、世界の読者を視野に入れているという意識が崩れることはないのだ。

イギリス人少女が世界に興味を持っていたり、海外への移住が現実的な問題として存在したりしていたことは、編集者が読者の質問、相談に返答する読者投稿欄 “Answers to Correspondents” からわかる。“Answers to Correspondents” は、第 3 号以降毎週雑誌の最後のページに掲載されていたのだが、膨大な数の投稿を整理するために、家事、裁縫、芸術、ドレスなどのテーマで分類しており、当てはまらないものは “miscellaneous” のセクションに入れられた。創刊から 2 年後、“Answers to Correspondents” に “Emigration” というセクションが登場し、何らかの都合で海外に移住したい、もしくはしなければならない読者からの相談が寄せられている。例えば、1882 年 12 月 30 日には、より良い仕事を求めてニュージーランドへの移住を検討している読者からの投稿がある。このようにして、『ガールズ・オウン・ペーパー』は個々

の読者の相談に乗りながら、読者の視野を世界レベルへと拡大させることに貢献した。また同時に、これは「外国」がこの時代の少女にとって身近なものとなっていたことを意味している。このように、『ガールズ・オウン・ペーパー』は、読者に向かって“our girls”と語りかけ、すべての読者は同じ girlhood を共有し、同じコミュニティに属する「友人」であるというポーズをとっているということを強調しておきたい。

しかし、実際には『ガールズ・オウン・ペーパー』は girlhood を差異化し、階層化していたと言わなければならない。本節では、foreign と colony をキーワードに、帝国の外の国と内側の国に関して、雑誌と読者の間でいかに情報が発信され、受信され、また再発信され、girlhood が越境することによって、『ガールズ・オウン・ペーパー』における girlhood の実態がいかにその前提から変質しているかを検証する。

3-1. Foreign への態度

「外国」と一言で言っても、『ガールズ・オウン・ペーパー』においては2つの「外国」がある。それが、foreign の国々と colony の国々である。ここでも単なる外国と区別するために foreign と colony という表記を用いる。まず『ガールズ・オウン・ペーパー』にとって最も遠い存在である foreign の国々、つまり帝国の外の国への態度を概観する。Foreign の国々に関しては、欧米各国はもちろん、日本や中国についての記事も多く掲載されている。

日本を例に挙げると、まず浮世絵の模写が1880年の年版第1巻の付録のカラーイラストとして採用されている。1880年掲載の“A Peep in Japan”という記事では、1ページ分のイラストとともに日本の寺子屋が特集されている。“Irova nivoveto tsirinourouwo. Wagayo darezo tsoune naramou. Ou wi no okuyama kefou koyete. Asaki youmemisi evimo sezou oun” (“A Peep in Japan,” vol. 1 31) といういろは歌が掲載されているが、この記事は基本的に読者の心理に同情や寄り添いを求めることのない、知識の提供の場となっている。

しかし、イギリスがいかにアジアにも「良い」影響を与えているか、という話題には大変敏感である。1882年掲載の“The Empress of Japan”という記事では、若き日の昭憲皇太后が特集されているが、焦点は「昭憲皇太后がいかに、日本に西洋的な女子教育を導入し、励行したか」というところにある。

The present Empress of Japan seldom appears on public occasions or ceremonies, but she has a reputation of being well-educated, and wise and kind. She shows her interest in the welfare and advancement of her subject by her patronage of Normal School for Girls in Tokio, the capital of Japan, formally called Yedo. . . . These are signs that the Oriental seclusion of Japanese ladies of rank is giving way to the influence of contact with European society. (C. J. T., vol. 3 312)

これは、「未開拓」な日本の女性教育を「改善」したヨーロッパの文化を称賛するような記事だと言えるだろう。このようにして、『ガールズ・オウン・ペーパー』は、いかにイギリス含むヨーロッパの文化が優れており、他国を「改善」することが善行であるかという思想を読者に教え込むのである。これは中国も同様で、同年の“Girl’s Work in the Mission Field—China”という記事では、中国には西洋文化が介入する余地がないほどに道教と儒教の教えが浸透しており、キリスト教を

布教するには多額の寄附が必要だ、ということが書かれている (Selwood, vol. 3 388)。ここでは、キリスト教以外を信仰することは「未開の地」の証であることが示唆されている。つまり、foreign の国々は「未だ帝国の力が及んでいない国」が存在するという「知識」として読者に紹介されているのである。ヨーロッパの foreign の国々と比較してみても、その態度は変わらない。1882 年掲載の “Life in a German Country Parish” という記事では、ドイツの少女がどれだけ時間に正確に生活しているかという話を書かれており (vol. 3 443)、また同年の “A Peep at Schoolgirl in Eastern Siberia” という記事では、ロシアの上流階級の少女がどのような学校生活を送っているかが書かれており、よくロシア正教の教えを守って生活しているという風に結ばれている (vol. 3 567)。

foreign の国々は、読者が教養として知っておくべき知識として掲載されているほか、イギリスの優越性を強調するための役割もある。foreign の国々は、物理的に「外」の存在であるだけでなく、『ガールズ・OWN・ペーパー』が提示するような girlhood を共有するコミュニティからは弾かれてしまうような、心理的にも「外」の存在として描かれていると言える。

3-2. Colony への態度

次に colony について考えたい。Colony はイギリスから見たら、位置的には海外だが、あくまで帝国の一部であり、一体感を持つように描かれる傾向にある。ここでは当然ながら最も頻繁に登場する植民地であるカナダとインドの表象をヒントに colony と呼ばれる国々と girlhood の関係について考察する。

まず、イギリス人の移住先として適切とされていたカナダだが、その描写にはいかに上流階級がカナダを好むか、ということへの言及が目立つ。1882 年掲載の “The Princess Louise in Canada” では、ヴィクトリア女王の娘で、後のカナダ総督になるアーガイル侯に嫁いだルイーザ王女がカナダを愛し、また怪我の療養のためカナダを離れていることをカナダ人が深く悲しんでいるということが書かれている (vol. 3 564-65)。最後は “. . . her present visit may be as bright and sunny as the Canadian blue sky itself” (vol. 3 565) と締めくくられ、カナダとルイーザ王女の一体感が強調されている。

同年の “Summer in Muskoka, The Free Grant District of Canada” では、カナダがいかに恵まれた理想的な環境であるかが綴られている。

[T]he higher classes of English people seek health and recreation on the Continent, especially during summer and autumn of each year, so few ever even think of visiting the new and larger Britain on the other side of Atlantic. Tourists from the mother country are not nearly so numerous as the attractions of the journey would one to expect, though all who have taken a run through Canada in the holiday season give a glowing account of the loveliness of the scenery in many parts, the perfection of the means of travel, and comparative cheapness of living. (Lawrason, vol. 3 730)

この記事は、カナダが “the new and larger Britain” と言われていること、そしてカナダがイギリスの “the higher classes” の保養地になっていること、また旅行にうってつけの美しい場所で、かつ生活費も安いということを畳みかけ、カナダの理想的なイメージを読者に植え付けている。

カナダに関する記事は、イギリスとカナダの「平行」な繋がりを強調し、イギリス人の中産階級の読者に、王女も愛するカナダでの豊かな生活を想像させ、移住を促すという働きがあったと考えられる。

次にインドについて考察したい。インドはカナダと真逆の植民地である。1884年掲載の“Medical Woman for India”では、イギリス人の女性医療従事者がインドで仕事を探すことは、男性に肌を見せることができないために病院に行くことができないインド人女性の命を救うための義務なのだということが強調されている。更に、“[Author found] by experience that they will gladly go to European lady for advice, and willingly take whatever medicine she prescribes. . . . The introduction of these institutions would be the means of saving many thousands lives yearly” (Hoggan, vol. 5 281) とあるように、インド人女性は「喜んでヨーロッパ人女性のもとに助言を求めに行く」、明らかにヒエラルキーが下の存在として描かれているのである。とはいえ、実際に多くの高学歴女性が医者のようにイギリスでは得られない仕事や配偶者探しに適している場所として、インドに移住したようだが、『ガールズ・オウン・ペーパー』はそのような事情には触れず、この雑誌がインド人女性の代弁者なのだというスタンスでもって、イギリスとインドの格差を描き出している。

加えて、読者である少女たちに、上記のようなイギリスおよびヨーロッパ女性に続くことを鼓舞するような箇所もある。

I am content to leave this part of the question to be settled at some future time, and to trust to enlightened public opinion in India, which is yearly becoming more favourable to the higher education, fuller life, and public employment of women to appreciate the importance of half, nay, the whole of the cast populations of India . . . (Hoggan, vol. 5 282)

この一節は、女性の高等教育や就職がインドで受け入れられていくことを望む、と言っているわけだが、これはインドを教育でもって支配すると同時に、読者たる少女たちが将来この記事に出てくる女性たちのように教育を受け、宗主国の人間として働き、帝国を強化することを望む、ということをも暗示しているように思われる。

もう一つ例を見てみよう。1885年掲載の“Girl Life in India”という記事は、執筆者が読者にボンベイを案内するという形で書かれている。ここでは、インドに住むイギリス人女性は“the poor native women”を救わずにはいられないのだと言って、インド人への同情を誘う (A Zenana Missionary, vol. 6 492)。同時にこの記事では、イギリス人の親をもつインド生まれの少女への同情も掻き立てていることも見逃せない。“Did it ever occur to you that there could be English girls who have never seen snow in the winter, nor primroses in the spring, and who have no idea of the autumnal glory of our woods?” (A Zenana Missionary, vol. 6 492) この一節について Smith は、“This passage casts doubt upon whether girls born of English parentage in India can be entirely civilised because of the environment in which they have been raised . . . but they are nevertheless classified as ‘English’” (42) という解釈を加えている。『ガールズ・オウン・ペーパー』は、イギリス人の両親を持つものの、インドで生まれ育ってイギリスの地を踏んだことのない少女も“English”だというわけだが、ここには国境だけで断定することができない girlhood の境界線への不安を感じ取ることができるのではないだろうか。そしてこの一節はイン

ドへの同情を誘いつつも、同時にイギリス在住の少女には優越感を、インド在住の少女には劣等感を与える可能性もある。加えて、『ガールズ・オウン・ペーパー』は、5～6歳で結婚させられるインドの少女の生活を“darker life” (A Zenana Missionary, vol.6 492) と呼ぶことで、在印イギリス人少女の置かれた状況よりも、更に悲惨なものがあることを付け加えることを忘れはしない。こうして『ガールズ・オウン・ペーパー』がそれぞれの読者の置かれた立場を定義することによって、イギリス在住者、在印イギリス人、インド人少女の間にヒエラルキーが存在することが明らかになるのである。

Foreign と colony をキーワードに『ガールズ・オウン・ペーパー』を読み解いてみると、同じ girlhood を共有するはずの世界の少女は、帝国の内外で分断され、更に帝国内でもヒエラルキーが生み出されていることが浮き彫りになった。foreign の国々に関する記事では、読者は帝国の外の国の現状を知ることができるのみで、その国の人々への同情を掻き立てるような描写はない。一方、colony に関する記事は、現地での生活や現地の人々とイギリスおよびヨーロッパの格差を描くことによって、読者の想像力の活性化と感情移入を促す装置として機能しているのである。そうすることによって、読者である少女に「帝国」という意識が植え付けられたのではないだろうか。

4. コンペティションに見る girlhood の変質

これまでの考察は、全て雑誌発信でどのように foreign と colony が扱われているかが中心だったが、最後に読者発信の情報の扱いを通して、『ガールズ・オウン・ペーパー』における情報の双方向性とそこに見られる girlhood の性質の違いに注目する。

『ガールズ・オウン・ペーパー』で 1887 年に開催された、ヴィクトリア女王戴冠 50 年を記念した“The Queen’s Jubilee Prize Competition”というコンペティションを例に挙げよう。このコンペティションは、“Foreign and Colonial Competitors of All Ages” (274) とあるように、イギリス国内のみならず、植民地や外国に住む読者にも開かれたコンペティションである。読者には、「偉大な女性をできるだけたくさん挙げてリストを作る」という課題が与えられた。920 通の応募があり、そのうち 112 通は foreign と colony の国々からの応募だったという記載がある。半年後の結果発表では、12 歳から 26 歳まで年齢ごとに最優秀賞、1 等、2 等、3 等受賞者の名前と在住地が載り、最優秀賞者には金のブローチが贈られた (692)。

「偉大な女性」とは少女たちのロールモデルになり得る女性なわけだが、“The Notable Women Dealt With must be all be British subjects: foreigner will not count. It is not necessary that they should have been born after Queen Victoria came to the throne. All may be included who have lived *any part of their lives* in the reign of Her Majesty” (274 強調原文) とあるように、“Notable” な女性という肩書に当てはまるのは、「イギリス人」のみで、外国人は除外されてしまうのである。イギリス領のどこに住んでいたイギリス人でも良い、ということだが、外国人は外国人であるというだけで“Notable” ではなくなり、コンペティションから排除される。“Notable” な女性というのは、エンパイアビルダーとして帝国に貢献した女性のことを指すということだ。このコンペティションには、帝国の内外の女性のヒエラルキーを読者に内在化させる効果があっただろう。結果発表からは、実際に多くの国から応募があったことがわかる。オーストラリア、ドミニカ、フランス、ニュージーランド、日本などからの受賞者がいるが、イギリス本国以外からの最優秀賞の受賞者は一人もいないということには着目しなければならない。それどころか 22 歳部門で

は、“Special Prize for Foreign and Colonial Competitors”という特別賞が別途設けられて、オーストラリア人が受賞しているのだ。つまり、Beth Rodgers が指摘するように、この特別賞を設けることで、むしろ帝国の内外どころか、イギリス本国とそれ以外の国が完全に差別化されていることは明白である (56)。「全ての国の全ての読者」に対して開かれている、非常にグローバルなコンペティションだったはずが、結果をみると foreign や colony の国々読者は、『ガールズ・オウン・ペーパー』が求める理想的な答えを出すことができない、イギリス在住の少女に劣っている存在であるというレッテルを貼られるわけである。

雑誌から読者への一方通行な情報の発信の動きだけを見るのではなく、読者から受信した投稿の切り分け方を分析することによって、一枚岩に見えていた『ガールズ・オウン・ペーパー』の提示する girlhood が、実は国境を介して多層的に構築されていたことが明らかになった。

5. 終わりに

『ガールズ・オウン・ペーパー』が海外に輸出されることで、イギリス発信の girlhood が海を渡り、世界の読者が同じ girlhood を共有することで、巨大な想像の共同体が生まれた。世界に散らばる読者は『ガールズ・オウン・ペーパー』を読むことによって、海外にいながらにしてイギリス人の少女というアイデンティティを獲得したことだろう。しかし、『ガールズ・オウン・ペーパー』は、皆平等な読者なのだという一体感を与えつつも、foreign と colony を含むイギリスを分断し、更にコンペティションで行われていたように、イギリス国内と国外の読者を切り分けることによって、読者の同化と差異化を同時に行なった。「全ての読者」に向けられて発信された情報だったが、イギリス在住の少女、foreign の少女、そして colony の少女によって、受け取るべきもしくは受け取り得る情報が異なっているということが明らかになった。このように、girlhood という一つの概念が、形の異なるものに変質し、読者それぞれの中で再定義され、内在化されたと考えると、これは girlhood のグローバリゼーションであると同時に、ローカライゼーションであるとも言えるのではないだろうか。

引用文献

一次文献

- “Answers to Correspondents.” *Girl's Own Paper*, vol. 5, no. 220 (1884): 383-84.
- C. J. T. “The Empress of Japan.” *Girl's Own Paper*, vol. 3, no. 111 (1882): 312-13.
- C. P. “A Peep in Japan.” *Girl's Own Paper*, vol. 1, no. 2 (1880): 31.
- Hoggan, Frances E. “Medical Woman for India.” *Girl's Own Paper*, vol. 5, no. 214 (1884): 281-83.
- “How to Improve One's Education.” *Girl's Own Paper*, vol. 2, no. 79 (1881): 637-38.
- Lawrason, Julia. “Summer in Muskoka, The Free Grant District of Canada.” *Girl's Own Paper*, vol. 3, no. 137 (1882): 730-31.
- “Life in a German Country Parish.” *Girl's Own Paper*, vol. 3, no. 119 (1882): 443.
- “A Peep at Schoolgirl in Eastern Siberia.” *Girl's Own Paper*, vol. 3, no. 127 (1882): 567.
- “The Princess Louise in Canada.” *Girl's Own Paper*, vol. 3, no. 127 (1882): 564-65.
- “The Queen's Jubilee Prize Competition: Notable Women of the Reign of Queen Victoria.” *Girl's Own Paper*, vol. 8, no. 370 (1887): 274.
- “The Queen's Jubilee Prize Competition.” *Girl's Own Paper*, vol. 8, no. 396 (1887): 692-94.
- Selwood, Mary. “Girl's Work in the Mission Field—China.” *Girl's Own Paper*, vol. 3, no. 116 (1882): 387-88.
- A Zenana Missionary. “Girl Life in India.” *Girl's Own Paper*, vol. 6, no. 279 (1885): 492-94.

二次文献

- Jenkins, Henry, et al. *Participatory Culture in a Network Era*. Polity Press, 2016.
- Mitchell, Sally. *The New Girl: Girls' Culture in England, 1880-1915*. Columbia UP, 1995.
- Moruzi, Kristine. *Constructing Girlhood through the Periodical Press, 1850-1915*. Routledge, 2012.
- Rodgers, Beth. *Adolescent Girlhood and Literary Culture at Fin de Siècle: Daughters of Today*. Palgrave Macmillan, 2016.
- Smith, J. Michelle. *Empire in British Girls' Literature and Culture: Imperial Girls, 1880-1915*. Palgrave Macmillan, 2011.